

国民的記憶

(2008.7.8)

column4

教育能力開発センター准教授

小南 浩一

6月23日はアジア太平洋戦争末期の沖縄戦における戦没者を悼む「慰霊の日」である。1945年のこの日、沖縄戦を指揮する第32軍司令官牛島満の自決により、日本軍の組織的な抵抗が終わった日である。もちろん、戦闘はその後も継続され、沖縄守備軍が降伏文書に調印したのは同年9月7日であった。戦後50年を記念して作られた「平和の礎」には、沖縄戦で犠牲となったすべての人(アメリカ人や朝鮮人も含む)の名前が刻まれている。その数、24万人余で、今なお遺骨の収集→確認作業が続けられている。

このように沖縄の人々にとって、6月23日は特別な日である。しかし、本土の人たちにとっては、この日を想起することは難しい。来る8月15日は、戦後63回目の「終戦記念日」である。日本人310万人、アジアでは2000万人の犠牲者を出したアジア太平洋戦争終結の日である。広島に原爆が投下された8月6日、長崎の9日、これらの日は、新聞やテレビ、雑誌や書籍などメディアも「社説」で取りあげたり、「戦争もの」のドラマ、ドキュメンタリーなどを放映するなど、日本の国民にとって決して忘れてはならない日として記憶されている。8月15日や8月6日・9日を国民的記憶として顕彰する一方、この破局の原因となった対米英戦争の開始、いわゆる「開戦記念日」である1941年12月8日については、ほとんど知られていない。マスメディアもあまり取りあげない。

しかし、年配のアメリカ人にとっては、12月8日(アメリカ時間では7日)は、「リメンバー・パールハーバー」として強く記憶に刻まれている。さらに、対米英戦争の背景には日中戦争があった。日中戦争が泥沼化し、戦局打開の「大博打」がドイツとの同盟、即ち日独伊三国軍事同盟の締結であった。これによって第二次世界大戦と日中戦争がリンクする。したがって、1945年8月15日のそもそもの「起点」を、日中戦争のはじまり、すなわち1931年9月18日の柳条湖事件→満州事変とする見方がある。いわゆる「15年戦争」である。

この9月18日は日本のマスコミではほとんど報じられることがない。日本の大学生もほとんど知らない。「日本史」を受験した学生でも満州事変勃発の1931年は憶えているが、9月18日は知らない。受験で問われることもなければ、日本のマスメディアが取りあげることも少ないからである。

しかし、日本の戦争相手国中国の人たちにとってこの日は、日本人が広島や長崎の8・6、8・9を銘記するのと同様、「9・18事変」として、決して忘れられない国民的記憶の対象となっている。日中戦争が本格化した盧溝橋事件の1937年7月7日も同様である。

本学には多くの中国人留学生が在籍しているが、彼らのほとんどが日中戦争の起点として、また「民族屈辱の日」として9月18日や7月7日を記憶に刻んでいる。しかし、本学のみならず日本人学生は、この日を知らないのみならず、さきの8月15日や8月6日・9日といった「被害」の記憶すら風化しつつあるのが実状である。彼らは日中戦争の歴史的事実そのものを高校でほとんど勉強していない。日中のこうしたズレは、「歴史認識」のレベルではなく「知識」の問題である。

「ある社会が、たくさんの過去の経験の中から何を記憶し、何を忘れるがままに任せるのか?という主題…は常に現在の問題」(加藤周一「20世紀最後の8・15」『神戸新聞』2000年8月12日)なのである。